堀辰雄に於ける所謂日本回帰の虚実

――幷・折口信夫受容の実態――

大森郁之助

I

昭和十年代前半の文学現象としての所謂日本回帰を堀辰雄に於て捉えた論は、後に言及する幾つかの文章を除いては、殆どが、極めて表面的な把握と安直な納得に了っているように思われる。〈表面的な……納得〉とは、作品歴全体から見れば疑いもなく〝現代物〟の作家であり習作期には新興芸術派まがいの軽薄なモダニズムさえ指摘し得る堀が十二年秋から十六年晩秋にかけての四年間に集中的に四篇の王朝小説を書いたという突然変異と、その前年頃から(注1)沼空・折口信夫博士の特異な古代理解に関心を示し出している事とを結び付けての、〈最も純粋な古代学者折口を窓口としたことによって堀は極めて心情的に・いわば魂の面から、日本古典に親近した〉といった纏め方である。

――傍点部分の強調それ自体は、見当違いという訣ではない。例えば、「小説でも行きづまると、短歌に還るんぢゃないか」という一般論から川端の「雪国」を「僕は新古今だと思ひます。先生、いかがでせう。」(注2)と折口に問いかける気を起こし得た風巻景次郎氏(折口はこれには返事をしていない)のような、〈古代〉抜き・〈国〉抜きの文学研究者的な古典研究に導かれた場合(注3)を想定してみれば、導師が誰であったとしても同じ事とは云い切れない。又、その折口博士も指摘しているように、師芥川竜之介の「今昔物語式には最的確な王朝物」に比較して「心虚しうして書」いた堀ゆえに「極めておほまかにではあるが、おほまかだけに、王朝貴族の生活のてまを適切に捉へ」(注4)たという特色もあろう。

繰返すが、これらの理解はむろんその限りにおいて誤りではないし、些事というわけでもない。しかし同時にこれだけで全てが解明されたといえる訣ではないのも又、云うまでもなかろう。早い話、かりに折口の存在を重視するならその折口の特性は堀の古典摂受に具体的にどんな影響を与えているのか。さきにふれたような、芥川流のさかしらな古典処理を封ずるという、消極的な効果がそれなのか、それともっと積極的に、折口を介在させなかったなら持ち得なかったような理解なり発想なりを、堀になさしめているのか。折

口の学風の特色として最も人目を引きやすい――今点検しようとする我々にとってもだが、堀にとってもその目をとらえられやすく、具体的な方向づけとなりやすかったことが想像されるところの所謂民俗学的な古典解釈（古代理解）は、堀の作品に表われているか、否か。又、「国学者の典型」[注5]と見える一面ももった折口の、時間的にはやゝ後の例だが戦中歌集『天地に宣る』（昭17・9刊）に最もこだわりなく流露しているような祖国愛、同胞感覚は、堀の内部におけるそれらの自然な発動[注6]に係わって行ったか、否か。

右に挙げた第一の点は、比較的判り易い。堀が、学問的立場として折口の理解を推重随順しようとしたことは、明確な証跡が容易に数えあげられる。前引文で折口が「堀君の詩人としての権威を、感じさせる文章」と賞揚している堀のエッセイ「伊勢物語など」（昭15・6『文芸』、原題「魂を鎮める歌」）には、折口も指摘するように、死者への鎮魂における「希臘人たち乃至リルケの考へ方」と「私達の素朴な祖先たちのそれ」との違いとして、

私達の祖先らは、人の魂といふものをどこまでも外在的なものと素朴に考へて居ったやうであります。それゆゑ、それが結局は自分の慰めとなり、救ひともなることを少しも思はずに、唯、死んだ相手の魂を鎮めることのみをひたすら考へてゐたものと見えます。

という理解を述べ、又、万葉集巻十六第三八一一～三、車持氏の娘子「恋ニ夫君ニ歌」について

さういふ殆ど死なんとしてゐる女にこれだけの骨を折った歌なんぞは到底詠めさうもないことだと思へる（略）ひよっとしたらこれはその不幸な若い女の死を哭し、その魂を鎮めるために近親の者がその女の心もちになって代って詠んだものかとも考へられる。

とする。前者の〈外在魂〉観が折口博士の学説の一根底である事は言うまでもあるまい。又後者においても、瀕死の作者には過重の労作ではなかったかという疑問まではともかく、だから代作かという推測は、王朝文学に屢々見られるように貴人の命を受けて代作した旨明記した場合以外にも、代作という慣習が広くあったという一般的知識を前提として、それならこの歌もそのケエスではないか、というふうにしか生まれまい。そして古代文学における代作の一般性という考え方は、折口博士を経ねば持ち得なかったとは云い切れなくとも（折口の考え方の主要な一つであるから可能性は十分あるが）少なくともこの文中の堀の鑑賞からは導き出されるものではない。

同文の追記として

折口先生の説によると、叙景歌といふものは、先づ最初、旅中鎮魂の作であった。（略）折口先生の創見に富んだ説は何んと詩的なものでありませう。（略）僕はこの頃折口先生の説かれるかういふ古い日本人の詩的な生活を知り、何よりも難有い気がいたしてゐる者であることを、この際一言して置きたいと思ひます。

と、細かく分ければ別項目だが広くいえば同じく日本古代の鎮魂歌の成立事情についての折口学への傾倒の中で書かれた文であることを、闡明している。この追記を、単に本文で言い落した叙景歌について補足する為というだけのものと見ず、今の自分の古典観の立脚

点を示したものととるなら、前述の折口説に共通する代作観も折口説に依るものとして述べられている、と解すべきだろう。

そうした、折口説に依る古典理解を提唱した例としては、ほゞ同時期の「若菜の巻など」（昭15・8『創元』、原題「『若菜』など」）に、倭建命の白鳥陵伝説に発する貴種流離譚の伝統及びその情史化の傾向を略述した際、これも「折口さんが暗示せられてゐるやうに」「折口さんの考へられるやうに」と、繰り返し引き合いに出す。又、折口に依ると表明してはいないが「黒髪山」（昭16・7『改造』）での万葉集巻二第二〇八番「秋山の黄葉を茂み」及び巻七第一四〇九番「秋山の黄葉あはれと」の山中他界観への注目は、近いところで十三年一月『短歌研究』掲載の折口論文「万葉集巻二の綜合研究」（のち改題、「相聞歌概説」）や同年六月完結した『婦人公論』連載「万葉集恋歌読本」（のち改題、「万葉集の恋歌」）での言及と無縁に発想されたものと、考えうるかどうか。無躾な云い方だが、他ならぬ折口博士が右諸文で――いわば機会あるごとに――力説する必要を感じたところを、堀が独自に感知し得る程の日本古代への省察力を、折口の影響以前に（又は、別個に）備えていたとは思えない（前引「伊勢物語など」追記での、少なくとも表現上は全く無批判な折口説祖述者ぶりも、その証左となろう）。

そんなわけで堀の、学問的知識としての折口学受容は、客観的達成度はともあれ志向としては疑う余地がない。しかしその堀が、折口から学んだ理性的認識を述べれば一往は事足りるエッセイの類に止らず、一つの世界の創造である小説をも、折口的古代理解の上に築き上げた実例を、持ち得たか、となると問題は別である。

小説に関しての折口学受容の実態を、結論としての肯定否定はともかく、具体的に論証した例（漠然と〈折口博士のすぐれた洞察にみちびかれて〉などという、言っても言わなくても同じ事のような解説は別として）は殆ど見当らないが、端的に云えば頭初「万葉びととその村を背景にして書かうと」した企図（昭16・10・19付夫人宛書簡）が苦心惨胆の挙句に結局は「いかにも」堀「らしい」「『曠野』といふ中世風なものがなしい物語」になってしまった（昭18・8『婦人公論』、「『死者の書』」）という自作解説が、語り尽くしているのではないか。

十三年の冬近く、慶応大学での折口博士の源氏全講会に堀が出席するようになった時、池田弥三郎氏は「あまり国文学に深入りするのはかえって小説が書けなくなりそう」だと案じたというが、[注7] 池田氏の心配はその裏返しの形で、堀の小説に実現したといえよう。小谷恒氏の言葉を借りれば、「曠野」は「折口信夫を理解することによって王朝文学に一層深く入り込んだ堀辰雄の、もっとも書きたいと思う主題ではな」く、「堀辰雄の若い頃からの夢や憧れや薄命の女に対する愛などの渾然としたものが、もう一度実を結んだ」もの、「書きたい小説よりも、書き得る小説」[注8] であった。

折口独自の古代理解を尊重し、惹かれた事は明らかな堀が、自分の小説ではいかにそれに則り得なかったか――より正確にいえば、則った結果と思えるものも則ろうとして失敗した痕と考えうるものも共に、いかに小説の中にとどめていないか、二三の実例で示そう。

まず、王朝小説の第一作の「かげろふの日記」（昭12・12）の場合について。

原典上巻康保元年夏の記事に、母を失くした悲しみに沈む女主人公が、死者の俤の現れる霊域として「みみらくの島となむいふ」地の噂を聞いて「いと知らまほしう」おぼえる。この民間信仰については遙か後年ながら折口博士の孫弟子ということになる筈の山中耕作氏の「みみらく考」（『国学院雑誌』昭39・12）等もあって、民俗学的関心を喚起してもよい場面だったと思われるが、堀作品の本文には、母の死そのものが欠落していて、必然的（？）にこの場面――この信仰も描かれていない。母の死という、話の大本が省かれたのだから、この場面の欠落は堀の民俗学的視点の強弱に関らぬ、それ以前に決着のついてしまった事柄、とも云えよう。だがこの母の死を承ける、六年後の天禄元年七月に、日頃は間遠な兼家の許から〝死者の事だけは忘れずに〟盆供が届いたという件は、堀の本文にも原典と殆ど同じ詳しさで書き込まれている。つまり〈兼家との間柄〉に係る限りでは取り入れられる母の死の件が、〝民俗学的関心〟に依っては敢て扱われ得なかった――その程度の軽重差はあったという事は、云い添えてよかろう。

原典では右盆供の記事の直後に記された、同じ天禄元年七月の石山詣での際にも、女主人公は供人が「佐久那谷」とよぶ山中の異境についてそこを通りかかった馬が冥途に引込まれる由を物語るのを、聞き止めている。そして自らも「さて心にもあらず引かれ去なばや」という感慨をも抱くのだが、これ又石山詣での件全体が堀の本文には欠落している。そもそも堀の本文の構成方針は、原典における生活諸面の混在を整理して兼家への愛（とその縺れ）という一つの主題を追うことにあったようだが、折口から啓示された民俗学的視点といったものは、右の〈主題〉に付加すべき挿話をその立場から選ぶ、という程度の権限も与えられなかったと云ってよかろうか。

それでは、〈主題〉に関わる題材として堀本文に既に取り込まれている事柄に対しては、右の視点は活きているだろうか？

堀本文の「その四」に、長精進が二十日程続いて「夜分になると何だか苦しいやうな夢ばかり見せられてゐた」或る夜、女主人公は

そんな夢の中で、腹のなかを這ひまはってゐる一匹の蛇のために肝を食べられてゐた。――あんまり恐ろしかったので思はず目を覚ましたが、それからまた私がうとうととしかけると、また夢でもって、それを癒すには顔に水を注ぐが好いと何人とも知れずに教へてくれた。

と綴る。これは原典中巻天禄二年四月の「我が腹のうちなる蛇ありきて肝を食む、これを治せむやうは、面に水なむ沃るべきと見る」を、一往忠実に堀の小説中に移した結果だが、この夢の構成に関わっていたと思われる当時の伝承的感覚に於て蛇――それが体内に入る事が何を意味したはずかは、今昔物語巻二十四第九「嫁」蛇女医師治語」、巻二十九第三十九「蛇見ニ女陰一発」欲出」穴当」刀死語」、及びその変型として同第四十「蛇見ニ僧昼寝閑一呑受」姪死語」等によっても明らかであろう。この記事より前、天禄元年七月の石山詣での折の「この寺の別当とおぼしき法師、銚子に水を入れてもてきて、みぎのかたの膝にいかくとみる」という夢に注解して「銚子や水は正しく性的な象徴で（略）この夢は禁断された願望の昇華されたもの」とする川口久雄氏は、右の蛇の夢の個所では

（略）作者が長い間の空閨のもだえ、性の渇きが、転位され昇

華されて、法師が法水を注ぎかける夢となったのであろう。蛇が肝をはむというのも恐怖というよりも惨酷な願望の変型で、蛇は男性器を意味するかもわからない。(注9)

と釈した。

私見を添えれば、「水」が、一般的な生産の根源力としてでなく限定された「性」徴となるのは蛇ほど明瞭顕著ではなく、或いはより近代的な感覚における相かとも思われ、法水と蛇との先後軽重について川口氏の言いまわしはや、適切さを欠くようにも思えるが、それは今さしたる問題ではない。重要なのは蛇の夢が、例えば女主人公の禍々しい妬心・猜疑心の象徴か、などと臆測したりする余地のあるような、曖昧不可解なものではなかった――とくに折口説によらずとも、そうだった、という事である。

この日記のこの個所、この夢の意味について、折口博士自身の直接の言及の有無は定かでない（著述のみならず國學院・慶応両大学での講義題目を見ても、折口が蜻蛉日記を正面から取上げているのは昭和七年度慶応の課外研究会のみである）。

しかし、広く異類と人間の交婚伝承（蛇はその主要な一つである）は、性を積極的に取上げた南方熊楠流（中山太郎氏なども、分ければこちらに入ろう）に限らず、性がタブウ化していると評される柳田民俗学に於ても重要項の一つであって、後者に連なる折口も又初期の代表的大著『古代研究』（前引小谷氏文で堀が机辺に置いていたという）民俗学篇1に「信太妻の話」を収める他、屢々この問題に触れている。従ってもし堀が折口の学問を具体的な問題解決の学として学びとっていたなら、道綱母の夢をも何心なく原文通りに引き写して通り過ぎることはなかった筈だ。勿論この夢が異類婚姻の伝承に何がしか繋がっているなどと言うのではなく、右伝承のパタンが（折口の著述を通じて）頭にあればそれを連想させる場面として、〈蛇〉の意味が注意をひかぬ筈はなかった、というのである。（余談に属すが、岡野弘彦氏『折口信夫の晩年』に拠れば氏が時々蛇の夢を見ると告げた折、折口は「それは性欲だよ」と「鸚鵡返しのように間をおかない、確信に満ちた言い方」で断案した――但し「二十四年頃」のこと――という）。

「かげろふの日記」の蛇の夢への対応（正しくは無対応）ほど顕著ではないが、やはり折口学の反映が――表われ得そうな事情を孕んでいる対象を扱いながら――表われていない・むしろその逆、といえそうなのは、第三作「姨捨」（昭15・7）及び第四作「曠野」（昭16・12）における文芸の伝承性の処理＝〈伝承性の・個人体験化〉である。

「姨捨」のエピグラフとして記された古今集巻十七雑上の古歌「わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて」はそこでも「よみ人しらず」と正しく註記されていて、理性的認識としては更級日記の作者と明確に識別されているのだが、その反面、堀の自注「更級日記」（昭16・8『文学界』、原題「姨捨記」）によれば、これを本歌として孝標女の詠じた「月もいでやみに暮れたる……」よりも「この古歌そのものをこそ彼女に口ずさませたいやうな気がしてならなかった」ため「女の境涯をそれとなく暗示するかのやうに（略）題詞として置いておいたのである」という。実態不詳の伝承詞章の作者と孝標女とを気分の上では同一化して感じ、読者に対

しても、同一人物として造形はしなかったけれども同一化して感ずる気分は仕掛けてある、といえようか。

「曠野」についても一脈相通ずる事がいえる。「おもに」それに拠ったという原典、今昔巻三十第四「中務大輔娘成=近江郡司婢」語」と「同じやうな話が伊勢物語にもあ」ることは堀自身のちに記している（昭23・4刊、角川版堀辰雄作品集第六『花を持てる女』あとがき）。そうなる事情について、折口博士が前引『かげろふの日記・曠野』解説で「同じ伝へだとは言はれない」にしろどちらも「近江の国の古伝承」の筆録化と考えられる事を註したのは十年ほど後のことだが、しかし一般に、独創的と見える文字の背後に長い口承の時代或いは不特定多数の作者による段階的成立を考えるのはこれも折口学の一つの特質であった。万葉集中の名ある作者のものについて、又源氏物語について。後者の活字化は数も少なく全て戦後のことだが堀は源氏全講会でじかにそれを聞いた筈である。

だが「曠野」原話のそのような前史――「中務大輔女」が現実に数奇な運命に弄ばれた実在の一人格であるよりも、むしろ、いつの世かの実否も不確かな伝承が語られるそのつど仮託された、偶々相似た境遇・人物の称呼だったという、非個別性、本歌取りにも似た重層性――は、堀の「曠野」には殆ど影をとどめていない。殆ど、と云ったのは、直接には「姨捨」についてだが主人公の人格設定に関する小久保実氏の

この短篇では〝私〟は設定されていない。人物は〝女〟と〝男〟の性別が与えられているだけなのである。おもしろいのはこの女も男も、都会人でも知識人でもないことである。（略）ちょうど前衛的な小説や戯曲のように、ただ〝女〟〝男〟としたのは、知識人などとちがって彼女たち（彼たち）には生活があり、抽象的な理念でもって〝私〟を構成する必要がなかったからであろう。(注10)

と評したことが、同じ称呼を用いている「曠野」にもあてはまる筈だからである。主人公たちが〈都会人でも知識人でもない〉というのは単独には抵抗があるが、同じ堀の現代小説の人物との比較でならそう云えぬこともない。作者（都会人・知識人）に近い個性を与えないことは結局（堀の想像力とも関係してくるが）いかなる型の強い個性ももたない人物となり、結果的に原話の伝承性に近づいているとも云えようか。だがそれも、時代差を云い難い範囲内の幾つかの先行例、深田久弥の「オロッコの娘」（昭5）や太宰治「魚服記」（昭8）でのそれを思い合わせるなら、近代文学乃至昭和の小説という制約内でも甚だ不徹底なことは明らかだろう。

もっとも、結局実現しなかった構想としては、十九、二十年の交のものかと思われる創作ノオト「水のうへ」「出帆」(注11)が遺されていて、両者共に「妣ノ国」といった所謂折口名彙(注12)及びそれに代表される常世観が現れる。又前者では、万葉集巻一・七二「たま藻刈る澳べは漕がじ」を

けふはしきりに我が枕のあたり床のあたりが目に浮んで思ひ去りにくいかくいふときに凶事があるものだ

と釈し（この考え方は「出帆」原本13頁「身代り」にも記されている）、巻二十・四三七二「足柄のみ坂廻(タマ)はり」四四二三「足柄のみ坂に立して」四四二四「色深く夫(セ)なが衣は」について

家を離れて、まもなく、道から、かうした歌の取り交せをする習慣があった。（略）信仰的な場所にむいて振るときは、遠人もその袖を認めると考へた。（略）相手の魂をして乞ふマジックで、同時に恋ひ心を示す方法にもなってゐた

と注解し、巻六・九二五「ぬば玉の夜のふけゆけば」について

魂が夜になると昼間きただけの道をフルサトの方へ帰ってゆく。それを目をつぶって、昼見た或美しい風景の中に、止める。（略）ソノ魂が自分ノ家ニ帰ッテ、自分ガソコニオイテキタ片方ノ魂ト一ツニナルト、ソレノ漂ッテヰル床ヤ枕ノアタリガハッキリ見エ、自分の俤ガソコニ立チ現レル、ソレハヨクナイコトトシタ。

と解説を加えている。又べつに「妹を偲ぶ歌」の小見出しで、

「妹を偲ぶ歌」も実は純粋に自分を慰める為のものではなかった。……ほんとうは大多人数の驚異をめどに据ゑた叙事脈の抒情詩であったのである。旅行中に「家なる妹」を恋しがった歌の多くは、同行の旅人の共通の感情を唆る処に立ち場があったのだ。其等の歌は、「旅のうたげ」の席で謠はれ、（略）都の人々の口に愛誦せられる様になる。現に万葉集の羇旅歌や相聞の部に収めたもののある部分は、さう言った道筋を通って、世の記憶や記録の上に、簡単ながら、ある生活の俤を留めたのである。

という、古代歌謠の成立・伝播・記録の事情に関する見解も、まとめられている。袖を振る行為のもつ信仰性、旅中の（留守宅の）鎮魂作法、宴席の歌としての成立・伝播説など、いずれも折口の万葉講義に繰返し説かれた重要項目の一つだが、戦後折口学乃至民俗学的方法一般の驚くべき普及・拡散を経た現在でも尚、十全の意味の定説化したとは云い難い。ましてこのノオト成立の時点で、いつ誰からともなく聞き知った考え方、とは考えられぬ。

いま一方の「出帆」についても、小久保実氏の、その主題を折口学における常世＝「妣の国」観に基づいた「本つ国に関する恋慕の心（略）にちがいない」という認識[注13]がある。

しかしこれらのノオトは、結局、企てを出なかった。十八年一月発表の「ふるさとびと」以降小説は一篇もまとめ得なかった堀の体力・気力の衰えが、妨げたのか。それとも、これら折口による古代理解がそれまでに築き上げられた堀の文学世界の情感（「曠野」の場合、参照）と、どうにも組み合わされ得ず、そして、後者をつき崩してそれに代る新しい情感を与える――ほどには前者も勢威を有さなかったのか。水かけ論は好きなだけ続けられようが、ともかく現実の成果からいえば、折口の古代理解に導かれたと客観的に云い得る――折口学の痕を印した堀の創作活動は、ゼロに等しい（創作活動以外の面、或いは以前の段階と見合わせて云うなら、無残にもゼロに等しい）とするのが、正当であろう。

II

それではいま一つ、個々の日本古典の正しい解釈という理性的認識の問題とは一往別の（多くはそれ以前の）、そうした日本古典に目を向けてゆくそもそもの心情的要因に関わる折口の影響、ということはどうか。この方は理論・知識と違って、此は折口の（折口からの）心情、彼は誰それの……、という仕分けは難しい。ここは大ま

かに、日本古典を西欧の文学（とは限らないが近代日本の知識人のスタンダアドとして）と公正に比較した上で此の点が（此の作品が）客観的に優れているから、といった、恰かも一定の国籍・民族に属さない普遍的理性が存するかのような理由づけをした上での古典評価と対照して、そうした理由づけを経ない、より自然感情的な、批判者からは当時のナショナリズムの風潮に感染じたものとも見られそうな要素の、有無――濃淡、という形で考えたい。

この視点に関り合いそうな論争（？）が、先年、杉野要吉氏から、小久保実・高田瑞穂両氏を、それぞれ別個の仮想敵（？）として挑まれた。(注14) その中、小久保氏に向けられた杉野氏の言い分を要約すれば、小久保説の

（堀の）日本の古い美への心情の傾斜を、当時の日本の「日本的なもの」の流行現象と結びつけることは、分かりが早いかわりに、本質的なものを見逃すことになる。

という見方（昭42・2『解釈と鑑賞』収、「王朝小説の方法について」）は「昭和十年前後文学史における歴史的存在としての堀文学総体にかかわる本質的なものたりえ」ず、「堀の日本回帰」はもっと深刻に「日本浪曼派を中軸とする昭和十年前後の時代状況と内接している」とするものだった。

じつをいえば右に要約した杉野反論の趣意からみても、又後述する同論の論拠から推しても、小久保文に云うところの〈当時の日本の……流行現象と結びつけ〉た浅薄な堀辰雄観が杉野説をさしているとは思えないのだが、当の杉野氏が「明らかにわたくしへの批判として、小久保実氏の見解をうけとめることができた」と云うのだから致し方がない。杉野氏の諸論文の本文からはそうは受け取れないけれども氏の底意は、むきつけに云えば堀の日本回帰を流行現象の一端と説くものだった――と仮定して、論を進める。

さて、同文における杉野氏の「時代状況反映」説の論拠は、二大別して、一は堀のエッセイ「更級日記」（昭16・8『文学界』、原題「姨捨記」）に云う、「少年の日（推定大正十四・五年――杉野氏）」孝標女の日記読後に「さういふ古い日本の女のひと」への「人知れぬ思慕」が胚胎して以来の、日本古典への関心の永さであり、二は、「更級日記など」（昭11・5『文芸懇話会』）や十二年二月十一日付神保光太郎宛書簡に見える、佐藤春夫の法然伝「掬水譚」（昭10・6～9東京日日新聞）や保田与重郎の「和泉式部」（昭12・2『文学界』）萩原朔太郎「情熱の歌人式子内親王」（昭10・9『コギト』）等に向かった、堀の関心の方向性である。後者はたしかに、大まかに概括すれば『コギト』・『日本浪曼派』的＝〈時代の風潮〉的日本回帰――杉野氏の云い方では「昭和十年前後の歴史的状況そのもの」への「内的なするどい反応」――とも見うるものだろう。

だが、それが（それも）作用していた、という一事実は、それそのもの（それが全て）だったという総合評定とはかなりに異なる。いくら論じ合っても所詮は各自の対〈時代状況〉感染体験の差に帰する問題かも知れぬが、人は、時代状況というものに全てを――とは云わなくとも根本を、決せられ得るものか否か。時代状況という一般共通項以外に、それと同程度に見逃してはならない重要要素が、個別に、各自の内部に併在はしないものか。例えば杉野氏と小久保氏という同時代人の間で、十年代作家の〈日本回帰〉をどう捉える

かについて、四十年代の「時代状況」は同一に働いているだろうか？その結果は、なぜ、逆の形に出たのか？

テエヌの環境決定論の新法則定立を夢想するよりも、〈日本回帰〉と名づくべき「時代状況」が――堀にも作用したとして（その可能性はむろん有る）――他と異なる＝堀独自のどんな別要素と複合し、どのような独自の結果を生じたか、という事の方が、有意義なのではないか。

例えばこういう事がある。――〈日本回帰〉の第一作ということになる「かげろふの日記」のモチイフについて、堀は、自注「七つの手紙」（昭13・8『新潮』、原題「山村雑記」）で同作執筆当時の心境を次のように記す。

きのふの午後も、（略）私はアベラアルとエロイィズの手紙の事を書いた本に読みふけってゐました。（略）私はこんどの仕事には、さういふ手紙や日記を残していった昔の不幸な恋人たちの一人を取り上げて見たいのです。さう、まあ王朝時代のものなら申分ありませんが、その頃の不幸な婦人たちの残していった多数の日記や家集のうちに、それを私がちょっと換骨奪胎しただけでそのまま私の好みの物語になって呉れるやうなものがありはしないか知らん？　（一）

と、又

常にわれわれの生はわれわれの運命より以上のものである事、――「風立ちぬ」以来私に課せられてゐる一つの主題の発展が思ひがけず此処において可能であるかも知れないのを見、私は何か胸がわくわくするのを覚えてゐる位です。　（二）

と。これに依れば実際に素材となった王朝文学自体がモチイフを与えたのではなく、「アベラアルとエロイィズの手紙」を一例とする西欧の恋人たちや「風立ちぬ」に繋がるいわば堀在来の主題が日本の古典を藉りたまでで、素材の種類ほどにそれまでの堀の西欧文学風と切れている訣ではないことになる。

ところが先年杉野氏が前引論文中で、書簡形式の右「七つの手紙」の「資料として用いた加藤多恵（のちの堀夫人）宛原書簡や同時期他宛書簡に対比」して、

堀は、作品成立過程にあった歴史小説からの挫折の様相を、「七つの手紙」から排除し、結果としての作品「かげろふの日記」に見合った形にそれを粉飾している点があるのである。

と主張した。つまり堀の日本古典取材はじつは矢張、それまでの堀・それまでの西欧文学志向とは別のモチイフに発していた（その直後作の「かげろふの日記」ではそのモチイフは実現し得なかったが）ことを、指摘したのである。ここに指摘された事実に拠って判ずれば、堀の心底は実現した作品によって見る以上に日本古典に傾斜していた――片足も、それまでの西欧志向の上には置いていなかった訣だが、しかし四年後の王朝物の最終作「曠野」については丁度これと逆の事情が検せられる。十六年秋の堀は旅先の大和路から、前回と同じく多恵夫人宛書簡には

けさはクロオデルの本をよんだ　こんどの小説は、いつだか僕のいってゐた「受胎告知」の主題がその中心のモチイフとなって来だした（略）さういったものを万葉びととその村を背景にして書かうといふのだ　（昭16・10・19付）

と述べながら、同じ作品の意図を、これ又書簡を元とした「曠野」自注である「十月」（昭18・1、2『婦人公論』）では

（略）何処か大和の古い村を背景にして、Idyll風なものが書いてみたい。そして出来るだけそれに万葉集的な気分を漂はせたいものだとおもふ。

（十月十二日、朝の食堂で）

と、原書簡に云う〈万葉びと〉云々はその儘だがいま一方の〈「受胎告知」の主題〉は挙げず、更に後段で、間接的ながら

（略）この戯曲（クロオデルの「マリアへのお告げ」）の根本思想をなしてゐるカトリック的なもの、ことにその結末における神への賛美のやうなものが、（略）僕にはだんだん何か異様なものにおもへて来てならなかった。

（十月十九日、戒壇院の松林にて）

と、「曠野」構想中の心境とは対立的なもの――恐らく「曠野」の主題とも、少なくとも関りないものに措定している。[注15]「かげろふの日記」に対する「七つの手紙」が「作品成立の結果をもとに、それにつじつまを合わせ虚構の書簡として書かれた作品解題」（杉野）であるなら、同様な性質が「曠野」に関する「十月」にも云えるわけで、杉野氏の指摘に倣っていえば堀は「曠野」について、実際のモチイフであった〈「受胎告知」……〉を結局実現させ得なかった儘隠蔽したのであり、「曠野」構想頭初の堀の心底の西欧への傾斜ぶりは現存「曠野」及び「十月」によっては窺えない（程の強さだった）、ということになろう。すでに実際の創作行為としても四年間日本古典に昵んだ挙句の時点で、なおかつ、その程度には西欧的モチイフを含んで日本古典に取組もうとした、――この意味は決して軽視してよいものではあるまい。

「十月」にはこの他にも実在書簡と対応しない（だから虚構とはいえぬが）記述の一つとして

けふは薄曇ってゐるので、何処へも出ずに自分の部屋に引き篭ったまま（略）、希臘悲劇集をとりだして、それを自分の前に据ゑ、別にどれを読み出すといふこともなしにあちらこちら読んでゐた。そのうち突然、そのなかの一つの場面が僕の心をひいた。（略）僕はおぼえず異様な身ぶるひをした。僕はしかしそのときその本をとぢて、立ち上がった。このまま此の悲劇のなかにはひり込んでしまっては、もうこんどの自分の仕事はそれまでだとおもった。……／かういふものを読むのは、とにかくこんどの可哀らしい仕事がすんでからでなくては。――

（十月十三日、飛火野にて）

午後もまたホテルに閉ぢこもり、仕事にもまだ手のつかないまま、結局、ソフォクレエスの悲劇を再びとりあげて、ずっと読んでしまった。（略）でも、さういふもの、さういった悲劇的なものは、こんどの仕事がすんでからのことだ。こんど、こちらに滞在中に（略）僕が心愉しく書かうといふのには、やはり「小さき絵」（前出Idyllの訳）位がいい。

（夜、寝床の上で）

と、自分の「こんどの仕事」が希臘悲劇からかけ離れた物であることを、繰返し強調する。皮肉にいえば、わざわざ奈良まで出かけて来て「万葉集をひらいたり埴輪の写真を竝べたり」しながら「天平

時代の小説などを」企てている身が、一方で〈なんとなく〉希臘悲劇集をひらいてしまう事自体、抜き難い西欧傾斜の証左でもあろう。だが前述の〈受胎告知〉隠蔽操作と思い合わせると、その事を殊更記した上で更めて自作から遠のけてみせた堀の意図は、たとえ苦しまぎれの趣があっても、力ずくでも、とにかく出来上った作品の反（又は非）西欧性を言いたかったのかと思われ、そうまで懸念するほど堀自身にはこの作品〈前史〉の西欧的要素が自覚されていたのか、と考え込まされる。

「十月」における堀がこの段階でなお「唐招提寺の松林のなかで『此処こそは私達のギリシアだ』と感じる」ことを、前引小久保氏も注意しているが、[注16] しかし反面からいえば杉野氏の指摘するように、[注17] かつて〈歴史小説〉への宿望をいだいて京都に滞在している間にさえ

> 自分のリルケの本といへば殆ど全部其処に置きっ放しにしてある山里の方が変になつかしくなって、（略）京都や奈良をぶらぶら歩きまはってゐるのに一種の悔いに似た気もちさへ感ぜられてきて仕方がなかった……　（傍点引用者）

と（「夏の手紙」、昭12・9『新潮』。原題「若き詩人への手紙」）リルケを優位に置いた頃と比べれば、ギリシアと等位に捉えるだけまだしも日本古典への傾斜が増した感じ方とも云えよう。だがその、傾斜が増した筈の段階で、古典取材作の〝真のモチイフ〟の重心は逆方向に移動しているとすると、どちらの変化を重視するかという問題以前に、そもそも堀の日本古典観に一定方向の変化（深化にしろ退却にしろ）を想定する事自体、一つの空想ではなかったか、という疑いも湧こう。

と、以上は、杉野氏にその最も精緻な論理構成をみる或る種の先入見――堀の日本古典接近を〈時代状況反映〉という社会性と自覚的・有目的的志向とで説明し尽くされるものと予想し、かつ、ひょっとするとそれが作家のあるべき（少なくともノオマルな）内実と考えているかと思わせる論への疑問を述べたのだが、先ごろ、〈時代状況〉への反応を考える点では共通だが反応の内容として強調するところは逆ともいえる。小川和佑氏の見解が現れた。[注18] 一口にいえば日本回帰の時代思潮の反映でなくてそれへの批判・抵抗を見ようとする論である。

氏はまず「従来、立原（道造）追悼の文献としてはしばしば引用されては来たが、第二次大戦に対する堀の知識人としての立場からの発言として論じられたことはなかった」堀のエッセイ、「木の十字架」（昭15・7『知性』）末尾の、夏も終りの軽井沢の教会の弥撒の場面を取上げる。その日はナチス・ドイツが対ポオランド宣戦布告した翌日で、「おそらくけふこの教会に集ってきてゐる人達は、それぞれの祖国の危急をおもって悲痛な心を抱いてゐるものばかりであらうのに、そんな中へ心なしにも数人でどやどやとはひって行くのが少々気がひけて」いた堀は、それらの人々にまじって無邪気に祈る二人のポオランドの少女の後姿に「いつまでも目をそそ」ぎ、又、第一次大戦時ドビュッシイが「無謀なドイツ軍のベルギイ侵入の事を聞き、家も学校も教会もみんな焼かれてしまった可哀さうな子供たちのために、彼等の迎へるであらうわびしいクリスマスを思って、

作曲した」晩年の歌曲、「もう家もない子等のクリスマス」を、胸に浮かべる。

この一節は「彼の反戦の意志の表明であった」と氏は云うのだが、一体この文章から汲み取りうる〈反戦〉とは、特定の国際情勢を条件としての限定的・政治的なものか、それとも具体的現実による検証を経ない（或いは拒む）情緒的かつ無責任なものか。前者でないのは明らかだろうが、後者にしてもドビュッシイ曲の歌詞の一節、「クリスマスよ、クリスマスよ、どうぞ彼等（ドイツ兵）のところへは行かないで。もう決して行かないで。さうして彼等を懲らしてやっておくれ。」といった、めぐりめぐって又いつかどこかで新たな葛藤（その一形式が戦争である）に連なるはずの憎悪の情を書きつけて、その前後に述べた戦争の悲しみとの間に何の矛盾も感じないようである。堀の理性を余程低く想定するのでない限り、欧州の戦禍は、現象自体としては悲しみを覚えずにいられないが根本的解決など思いみるべくもない、人間の宿命の一端に近いものとしての悲しみ（《に、とどまっている》と、付けたい者は付けてもよい）と読むべきではないのか。

さて、そうした疑念を抱かせる極めて漠然とした〝反戦〟感情（それを反戦とよぶならよんでも嘘とはいえないが、そのように拡大し不徹底に用いるなら〝反戦〟感情のない者など有り得なくなりそうな、無意味な規定）を前置きとして、氏は前引堀の遺稿創作ノオト「水のうへ」を、

ここには防人たちの悲劇の運命が描かれるはずだった。第二次大戦下に国家主義的思想家たちによって、強制的に唱和させられた「……（ママ）海ゆかば」や「……醜の御楯」の万葉歌の防人ではない。東国から徴集されて筑紫に送られる無名者たちの悲しみそのものを主題とする小説であった。（略）こうした歴史小説を意図していた堀辰雄の古典への関心は、昭和十年代の所謂、日本回帰の思潮と同一次元のものではない。（略）この「水のうへ」を突きつめていけば、当然、そこには天皇制を頂点とする国家権力そのものの否定に到達してしまう。

と断定する。だがこの論述は、物事を恣意に概念化して要約してゆけばどんな虚像も思いの儘だ、という見本のようなものである。

防人が主人公という理解は、解釈の第一段階ではそういうことになる、という意味で、一往は宜かろう。直接表面に取上げられている人物（群）はたしかに防人が中心となっているから。しかし、日本古典に対して余り親しみの無いらしい小川氏としては無理からぬ事かも知れないが、「水のうへ」冒頭に引かれた「家にてもたゆたふ生（いのち）。……」という万・巻十七・三八九六番は詞書によれば大伴旅人が大納言に任ぜられて太宰府から上京する際「傍従等の、別に海路を取りて京に上り、ここに羇旅を悲み傷みて」作れる歌であって、小川氏のように〈防人たちの……〉と概括しては事実を誤る恐れがある。ではなぜ、堀はこの歌を防人の物語の冒頭に置いたのか？

防人でも下級官吏でも律令制国家権力の被圧迫民衆という本質は同じ、といった論理の方が通りのよい場もあろうが、アジテーションの為に堀の作品を利用しようというのでないならば、当の堀にとって、又堀に日本古代の理解し方を教えた折口の学問に於て右二者の主要共通要素は被圧迫という点か、それとも理由の如何を問わず

羇旅という霊魂の不安定な状態かを、先に考えるべきだろう。現に同じノオトの後半にはこの信仰面からの羇旅歌解釈が繰返し記されていて（本稿Ⅰ節参照）、他ならぬこのノオトでも階級意識よりは古代信仰によって対象が捉えられている事を示している。つまり、冒頭の歌が「全篇を貫く主題」（小川）と見るのは文章構成上順当であろうが、堀におけるその主題とは防人に象徴される戦時下民衆の悲劇といったものではなくて、防人に代表される羇旅中の信仰的（堀の作品に移行した場合には、併せて情緒的）不安であったろう。[注19]

前半の終節（後半は一つのストオリイというよりも関連知識を不連続にメモしたような形になっている）「犠牲」で、少年が危険な送粮船の監督役を代ってやるのは、相手が「家なる妹」を思って嘆いていたからでもあるが、又一つには「海のかなたの遠い島への、あくがれ。（略）もしかしたら、妣のところへゆけさうな」という、これ又折口名彙で記された常世信仰のゆえでもあった。このことも、このノオトの立場の一つの傍証になろう。[注20]

これでもう「水のうへ」の本質は明らかであろうから、それを論った小川氏説自体の適否はこれ以上はどうでもよい訣だが（本稿で考えたいのは堀であって小川氏ではない）ついでに云えば、「……醜の御楯」（万・巻二十・四三七三）が悲劇的感情と対蹠的な、「国家主義的思想家」に誂え向きの好戦歌のような説明も、杜撰すぎよう。この歌の「今日よりは　かへりみなくて」という上二句が「今までは世話やく人もあったが、今日からその後見もなしに、おれ一人」と訳すべきであり、

思ふに、世話役を要するやうな男が、それを離れて出かける不安を持ちながら、（略）奮発と喜びとを持って、天子の軍に入ることを歌うたのだ。

と折口博士が説いたのは夙く昭和七年のこと（「万葉集に現れた征戦の歌」、3・15、16大阪朝日新聞）である。この〈不安〉を含んでの決意は、――決意へと踏み切ってしまったらもはや戦争の悲しみは消えている・悲劇ではない、と云うのではあるまい。では小川氏の挙げた〈好戦歌〉は挙げ誤りとして引込めるとして、それに代えて今度こそ悲哀・不安の一片も留めぬ金無垢の好戦歌を、たやすく見つけられるだろうか？万葉歌の解釈など近代文学研究者にそう簡単に出来るものか、と云うのなら、知らぬ事には口を出さぬがよい（これは小川氏一人に向かって云っているのではない）。それなら話を第二次大戦時に替えて、「……醜の御楯」程度の発想にも抑えられた戦争の悲しみを承認するなら、いったい、その程度の悲しみをも潜ませなかった応召軍人とその家庭が、十年代後半の日本に何％有ったと思うのか？して、彼ら（私もかつてその一人だった）は、悲しみをも抱いたから反戦者だったのか、結果として父を兄を送り出したのだから好戦国民の一人だったのか？〈反戦〉と〈厭戦〉の違い、更には戦争〈に対していだく、悲しみ〉との違いも感じ得ない語感で戦前文学の免罪符のように反戦のレッテルを好意の（であろう）押売りされては、昭和戦前の文学と民族の哀歓の実態は益々曇らされるばかりだろう。

ノオト「水のうへ」で構想されたのが〈反戦〉歴史小説だったろうという妄想から、小川氏の連想は奔放に伸びて、二十年二月の丸山泰治氏宛書簡の一節の

この頃はインキが凍って、こんな鉛筆を使はなければならないほどなのです――「思想が凍らない」だけ助かります。

を、

堀辰雄は弾圧の危険を冒かしてもあえて、不凍の思想をその作品によって貫こうとしている。

と歪曲する。「思想が凍らない」という一般現象を「不凍の思想」という特定事物にすりかえ、不凍とは環境に屈せぬ謂いで当時の環境とは戦時体制のこと、と、社会科の教科書じみた単眼的史観の狭い視野内で短絡して行ったのだろうが、〈冬の時代〉とか〈冬を越す蕾〉などのムード的語彙が十年代を要約する固定観念となって右の連想を助けたのだとしたら、阿部知二も宮本百合子も最早若い文芸評論家にとっては知らぬ昔についての煩わしい思考を省かせる色眼鏡のごとき、害の方が著しい存在となった訣だろうか。

そして、その〈反戦〉歴史小説（？）が結局書かれずに終った事情も、小川氏は「敗戦による時代の急転換のなかで、遂に未着手のままに放棄されてしまった」ものと見る。だが「この冬ぢゅうにすこし位手をつけたい」（昭19・12・28付葛巻義敏宛）・「この冬ぢゅうに腹案を立て、暖くなり次第、とりかかる考へ」（20・2・21付丸山宛）と云っていた作品が敗戦の八月まで、着手もされないが放棄もされずにいて、敗戦によって放棄された――逆にいえばもし敗戦が無ければまだ余命を保っていて何時か完成されたかも知れないというのは、あまり確実性のある想像とはいえない。又、敗戦と〈反戦〉小説の放棄という結び付けも、状況への抵抗というはりを失ってと云えば理屈はつくが、逆に勢いづけになる事もあり得た筈で、何故そうならずに斯うなったかの説明を欠いたのでは、むしろ反対に戦中の思想と国民感情を汲み込んだ構想だったのでそれゆえの放棄と考える方が、まだしも自然さがあろう。敗戦二か月後の折口博士宛書簡（10・26付）での

これから急に蔓延しさうな悪思想のなかで古い静かな日本の美しさを守って行きたい気持で一ぱいです　（傍点引用者）

という述懐を放言乃至無定見として無視する根拠がないなら、「水のうへ」乃至「出帆」（小久保実氏はこの方を重視するようである。注11引用文参照）から生まれ得た作品を「強い反戦意志に貫かれた小説」（小川）などという粗暴無雑なもの（戦中生活者の大多数の感情はもっと複雑だった筈だ）とする臆説は状況証拠からも否定されることになろう。

堀辰雄は死に至るまで、プルウストにも、リルケにも親しんでいた。（略）もし「出帆」が作品になっていたとしても、その小説はプルウストやリルケ等によって作者の内部に喚起されたイメージで照明されたであろう。

という小久保氏の推断（注22）は、客観的には妥当でも堀の霊には不満かも知れない。そう成ってよいなら苦労はなかった訣だから。しかし過去の実績を思えば意外とはしないだろう。だが反戦小説を期待されたと知ったら、問題のノオト以前の二十年間の作品内容と折口学を道標としての対古典姿勢の両つながら無視された当の本人は、ただ唖然とするばかりであろう。

注

1　小谷恒氏「堀辰雄と折口信夫」（『国文学』昭38・7）に大森の室生犀星先生の家で私が初めて堀さんに会ったのは昭和十一年のことであるが、（略）翌十二年になって脱稿した「かげろふの日記」の準備に、たしかもう入っていた。何となく折口先生の身辺に居馴れて若い頃を送ったに過ぎない私に、時々「蜻蛉」についてのこみ入った質問をし、／「折口さんの考えはどうだろうか。」／「先生はこういう問題をどう処理されるだろうか。」／などと畳みかけられ、（略）その頃（引用者注、「昭和十二年春頃」）、堀辰雄の書斎には「古代研究」三冊が座右の書として机上においてあった。

とするのが、直接の体験談として最も生々しい形のデエタかと思われるが、右引用部分の前段で堀の「蜻蛉」への着目が十一年に溯るもののように記すなど、全面的に依拠するには不安な点もある。（十二年晩夏の堀の書簡を参照すると、8・30付佐藤恒子宛で「蜻蛉日記だとか更級日記だとかいくつもいい日記を残していってくれた古い女たち――そんな女たちの一人を僕の物語の中に引き入れて虔ましく生かせてやりたい」、8・31付加藤多恵宛で「僕の快心にちかい女のひとを、古い日本の時代に架空して、そんな女性の残した日記みたいなものを」書いてみたい、と、必ずしも蜻蛉に限らずむしろ架空の日記を考えており、9・15付神西清宛ではじめて「今度は僕『蜻蛉日記』を自分のものにして書き直さうと企ててゐる」と指名している。）

2　『俳句研究』昭15・12収、座談会「俳諧と日本文学」での発言。

3　風巻にも堀の王朝小説に言及した文章（『短歌研究』昭15・11収、「新風断想」）がある。

4　角川文庫『かげろふの日記・曠野』（昭26・7刊）解説

5　池田弥三郎、中公新書『私説　折口信夫』（昭47・8刊）一四六頁参照。

6　いわゆる文学者の日本回帰の心因としては、この他に大まかに分けて二種類があげ得よう。一は旧左翼の転向作家・評論家に多く見られた、自己の立場の証明として祖国愛・民族意識を示そうという功利主義、二は国籍・民族にとらわれぬ公正・客観的価値判断（というものが有りうると仮定して）の結果、自己の対象とするに足る価値を認めたという、外国文学研究者などに多い態度である。

7・8　注1所引、小谷氏「堀辰雄と折口信夫」

9　岩波版日本古典文学大系『かげろふの日記』（昭32・12刊）補注七一及び七三

10　麦書房版『堀辰雄論』（昭40・11刊）、「姨捨」

11　共に角川版十巻本全集第八巻（昭39・11刊）に、初収。但しその成立（構想）時期については、最初に言及した小久保実氏（同全集十巻収「古典ノオトの解説」）が

昭和二十年の二、三月に新潮社の丸山泰治に宛てた書簡に出てくる「例の書き下ろしの小説」というのが、この「出帆」と結びつくのではないかと思われる。もしこの想像が認められるならば、「出帆」は昭和十九年の冬からのち、翌年の二十年に書かれたものではないか（昭和十九年十二月二十八日付、葛巻義敏宛書簡に、「この次ぎの仕事（万葉もどきの小説）のことなどぼんやりと考へてゐる。この冬ぢゅうにすこし位手をつけたいものだと思ってゐる」とある）。

と想定しているが、氏の参照する昭20・2・21及び3・3付丸山宛書簡には「書き下ろしの小説」とあるのみで内容（題材）については記していず、一方3・3付中市弘宛書簡に

「伊勢物語」は十分に読みくだいて、もうすっかり肚にはひったやうなので、只今、これからとりかかる仕事のまはりに、王朝的雰囲気を十分に漂はせておきたいので、源氏物語を通読して

ゐるところです

と、「万葉もどき」とは明らかに別物と思われる・しかし同じく〈歴史〉小説の構想を語っている。時代を（当然、主題も）異にする二種の歴史小説が同時並行して構想されるということは堀の平生からして考え難いとすれば、十九年末葛巻宛書簡の時点での「万葉もどきの小説」の構想は二十年三月までの間に「王朝」小説に変っていた（恰度「曠野」の場合のように）――従って丸山書簡での「書き下ろしの小説」は、これとは別物――のではないか。

12　注5所引、池田『私説　折口信夫』での用法。

13・16・22　角川版全集第十巻『堀辰雄案内』（昭40・12刊）収、「古典ノオトの解説」

14　『国語と国文学』昭43・7収、「堀辰雄における日本古典接近の問題」

15　小稿「『曠野』論への序」（昭46・5『日本近代文学』十四集収、のち桜楓社版『堀辰雄の世界』に収録）参照。

17　『文学・語学』第三十六号（昭40・6）収、「昭和十年代の堀辰雄」

18　六興出版版『評伝　堀辰雄』（昭53・6刊）第六章「さらに再び」

19　「家にても……」の歌自体については折口も十三年三月のラジオ放送「万葉集に就いて」（角川選書『わが幻の歌びとたち』所収）の中で「一首を選ぶとすれば」一番「好きなうた」として挙げ、「何といふか、非常に思想的、仏教的とは言ひ切れないが、ともかく今までの純朴なうた以外に思想的なものを含んで来た、といふ風に考へ」ているから、〈防人〉と直結しないにも係らず堀が着目したのはこの辺にも由来しているかも知れない。但し右評中に「思想」の語が見えるが、これが〈反戦〉思想説の助けになどならぬことは云うまでもない。

20　「犠牲」という同題の小節がノオト前半の末尾に二種類記されている（どちらも主人公?の死を語る）が、これは前の方。

21　この二書簡でふれている作品が同一物かどうかは、疑問がある。注11参照。

追記。國學院に学びながら一年ちがいで遂にその授業の正規の受講者となれなかった折口信夫博士ゆえ、公的な文章中で〈先生〉と付ける訣にゆかず、本文中〈折口〉又は〈博士〉と呼び捨てては置いたが、それでも博士は私にとって学部以来二十数年間の師の、その又師という由縁はある。今年は堀辰雄氏共々その二十五年祭にあたり、此の世で結ばれざりし年少者の、両つの和御魂に献ずる私かな祭文として本稿を草した。

（昭53・8・28）